

屋根の下

中央公論社

検印廃止
©

一つ屋根の下

著 者 佐多 稻子

昭和37年1月15日印刷

昭和37年1月20日発行

発行者 栗本 和夫

印 刷 中央精版

発行所 中 央 公 論 社

東京都中央区京橋2ノ1

電話561-5921

振替東京34番

定価 300 円

一つ屋根の下

「はよ、真ちゃんを起こさなきゃ、もう七時よ」

と、年寄りのおしげが、九州弁の残る言葉で、いつものように少しかん高く言っている。夜中の三時までレースのワンピースを縫っていた秋子は、その声で目をさました。

「さっき、起こしに行ったとき、はい、って返事をしたのよ」

不平そうに答えて、二階へあがってゆくのは姪の道子だ。

「お漬物は、きうりと茄子を出します？」

そう言うのは、秋子の内弟子のようになっている芙美江。彼女も昨夜、秋子のそばで十二時まで仕事をして、少し眠り足りないのにちがいない。ぶすつとした調子で言っている。

「はい、きうりはすぐつかり過ぎになるから、はよ、出してね」

おしげは今度も切り口上である。

秋子はちよつと眉をひそめた。朝はきまつて、みんなが不きげんに、そして、かんが立つてゐる。長男の、中学二年生の真吉がまた、みんなに世話をやかせる。

「泉さんのは、どうしましょう。茄子の色が変わるけど、あとにしますか」

二階の六畳に間借りしてゐる泉公平は、この家でいちばんあとに起き出してくる。勤め先きが出版社で、昨夜も校正の仕事でおそかった。

「もう、泉さんも起きなさるでしょうよ」

おしげは、朝はみんな早く起きるものと決めた答え方をした。夜おそければ朝も自然におそくなる、というのがわかり切つていながら、この瞬間は自分の氣負つた氣持で、そう言うのである。芙美江はきつと少し不満かもしれない。

秋子は、そんなみんなの氣持が、いつときに負いかぶさつてくるような氣がした。それは毎朝のことであつた。秋子はみんなの氣持をほぐすように、やわらかな調子で声をかけた。

「真吉は起きたの」

「はい、起きました」

と、姪の道子が答えた。秋子ももう、寝てもいられない。起きて境の板戸をあけた。台所を

ひろげて今ふうそこに食卓をおいた板の間に、朝の仕度ができていた。

高校二年の道子は、もう食卓につこうとしながら、おしげに遠慮したように言う。

「おばあちゃん、先きにいい？」

「ああ、いいよ。早いものから、しゃんしゃんすました方がいいよ」

至って気がいいのに、不思議に朝だけは不機嫌なおしげであった。秋子はそれを知っているから、自分が疲れていない時は気にもならない。今朝はまだ疲れが残っていた。けれども、おしげは秋子の継母であったし、ふだん、苦勞をかけているから、秋子は自分の感情を抑えた。

「美美江さん、あなた今日、早く行ってセットしていらっしやいな。泉さんが写真とってくれるはずでしょう」

「ええ」

と、美美江は、漬物を切りながら、あいまいに答えた。縁談の写真のことだから、わざとあいまいな返事になる。

2

美美江の返事は、あいまいに聞えたけれど、厭がっているふうではなかった。

秋子は雨戸をあけ、手早くふとんをたたみながら、美美江の気持を計っている。

梯子段に荒い足音がした。真吉がおりてきたのだ。この頃、急に背丈がのびて、母親の秋子よりも高くなっている。それでも顔はまだ幼い。眠そうに目をしばたたきながら、台所を見まわすと、

「おそくなっちゃった」

と、ひとのせいのように言った。秋子がすぐ聞きとがめた。

「なにを言ってるのよ。起こされてもおきないんじゃないの」

「そうお。ほんとに起こしたの。僕、知らないよ」

と、ぼんやり突っ立って、まだ言っている。

「あらア」

と、今度は道子が、

「二度目に起こしたとき、真ちゃん、はつきり返事して、ふとんの上に起きたのよ。その次に行ったら、また寝てたじゃない」

「そんなこと言ったって、知らないものは知らないよ。すっかり目が覚めるまで、ちゃんと起こしてよ。眠ってるものには責任はないんだもん」

「あきれた」と道子は投げたように言い返す。

「ほら、ほら、なんのかの言っていないで、早う、顔でも洗わんね。おそうになった、おそうになったって、なんでもひとのせいにして。御飯は、早うからできとる」

おしげが、もう真吉のおみおつけをよそいながら言った。

「ちえっ」

真吉は捨てぜりふで顔を洗いにゆく。

そんな真吉の、のそっとした肩つきに、秋子はふと、亡くなった夫の身ぶりを見たようにおもった。夫の真太郎が亡くなったのはもう十年前だから、息子の真吉が父親の身ぶりを真似ることなど、あるはずはない。それなのに、ちゃんと似ているから不思議だった。朝寝坊のところも父親に似ている。

「ああ、今日は、真吉、誕生日だったわね」

秋子がおもい出して言うのと、もう食卓にもどってきた真吉が、

「そうだよ。忘れてたの」

「忘れるとこだった」

「あぶねえな。自分の生んだ子の誕生日、忘れちゃ困りますよ」

「なにを生意氣言ってるの。御馳走、なににしよう。ねえ、おばあちゃん」

「さあ、ねえ」

「僕、カレーライスがいいや。あ、ちょっと待って。カツにしようかな。厚いのね」

秋子はおもわず笑い出した。

「なにがおかしいのさ」と真吉はタオルでごしごし顔を拭きながらそう言った。

「ううん」

と、秋子は、はぐらかす。生意氣言うかとおもうと、御馳走はまだカレーライスかカツレツ。おしげも同じおもいらしい。

「真ちゃんの御馳走はカレーライスに決まっとるよ」

「いいじゃないか」

「ああ、いいとも」

おしげが言い返し、ようやく朝の空気が和ごんでゆく。

3

道子が出かけ、そのあとに真吉があたふたと出て、あとは大人ばかり、朝の食卓をかこんだ。

今日は晴れるらしい。薄陽がさしていた。狭い庭先きに、あじさいが咲いているが、この二、三日の雨にたたかれて、もう色があせて見えた。

「真吉の御馳走は安くていいわ。小さいときは、もりそばいつてんばりでね。デパートの食堂へ連れていっても、大きな声で、僕、もりそば、つていうんだもの。こっちはずかしいみたいだったわ」

「今のうちは、まだいいけど。そのうち、だんだん。男の子は何を言うかわからんよ」

「今に、スクーター買え、なんていうのかもしれない」

「今の若いひと、みんな乗りものが好きらしいですね」

芙美江は機嫌のいい顔になっている。

縁談があるということで、明るくなっているのだとわかるから、秋子はそれをいじらしいとおもう。芙美江は、秋子の亡くなった夫の縁つづきの娘であるが、福島県の小さな町から、二年前に突然上京してきた。

はじめは親にも無断で出てきたらしかった。いろいろ聞くうちにわかったのだが、友達がみんな嫁よめづいたのに、自分だけ残ってしまって、それがはずかしくて町にいられないということであった。小さい町では、そんなこともあるのか、と秋子は察した。

親の方からも、東京でいい縁があったら頼むと言われて、秋子も気にかかっている。

今度の話は、とにかく写真をとり交してみようということではじまっていた。

今日、その写真をとってくれる泉は、まだ二階から起きてこない。

「泉さんは、今日はおひる頃出ればいいって言ってたから、芙美江さんセットしてきても、間にあうわよ」

「はい」

「ま、どんな人だか、とにかく写真を交換したいっていうんだから、してみればいいわ」

「泉さんは、知ってるんですか」

「なにを？ お見合いの写真だってこと？」

「ええ」

「知ってるでしょう。だって、かまやしないわ」

「でも、なんだか」

「そんなの、平気よ」

と、秋子は言って、それからわざと泉のことを話し出した。

「泉さんも、また好きな人があるらしいけど、今度はうまくゆくのかしらね。この前の人とは

長いことつき合っていて、結局、泉さんがことわれちゃったらしいけどね」

「そうなんですってね」

すると今度はおしげが齒がゆそうに言う。

「泉さんは、美人好みでしょうがないよ」

「おばあちゃん、泉さんのこの前の人、きれいだったわねえ」

「顔ばかりよくってもさ」

秋子がおしげを相手に泉の恋愛のことを話すのは、美美江の微妙な気持を要心してのことだった。

二階でも音が生じた。

「あら、泉さん、起きたらしい」

4

泉が起きたらしい、と秋子が言うのをきっかけに、美美江は食卓を離れた。

やがて、泉が二階からおりてきて、食堂をのぞいた。色の黒い、あごの張った顔だが、どこかに、やんちゃな表情があつて、明るい性格を見せている。

「おはようございます」

「案外、お早いですね。もっと寝てるのかとおもった」

「時計がとまってたんですよ。なんだまだこんな時間ですか。や、損したな」

「そんなことだろうとおもったわ。もう少し寝てらっしゃい」

「いや、もういいです。美美江さん、すまない。コーヒーいれてくれないかな」

「あら、コーヒーあったかしら」

「いや、僕、買ってきた」

と、泉公平はまた二階にかけ上って行った。その泉はおしげと同郷で、大学生のときからこの二階にいて、もう七年越し、家族のようになっている。

美美江は泉のためにコーヒーをいれた。泉は秋子たちにもというように、

「おばさんもので下さいよ」

「今、あなたの話をしてたところ」

「へえ、なにを？」

「おばあちゃんがね、泉さんは美人好みで駄目だって。今度のひとはどうなの？」

「なんだ。起きぬけにひやかされるんですか。処置なしだな」

「そう言いながら泉は、自然に笑いが浮んでくるように、にやにやして、

「どうぞ、コーヒーを」

と、おどけたおじぎをした。芙美江が、高い声で笑った。

秋子はさばさばと受けて、

「泉さんにコーヒーで朝から恋愛のお話聞いてもらえないわ。それより、今日、芙美江さんの写真、とってちょうだいね」

「そうだ。芙美江さんを美人にとらなきゃいけないんだな」

「せいぜい、美人にとって上げて」

「あらあ、先生」

と、芙美江は今度は困った声を出した。

芙美江は泉公平の前で、自分の縁談をはにかんでいた。それは秋子が気づいているように、微妙な心理であった。芙美江は泉より三つ年上の二十九歳であった。齡のちがいは逆のだけ、同じ家に暮らして、芙美江はいつとなく、若い泉に好意を見せている。それが、恋の感情になつては困ると、秋子はおもう。泉には、そんな気持はないからだつた。

秋子が、わざと、芙美江の前で泉の恋愛の話をあからさまに言い出すのも、芙美江の感情を

ほかへ向けようとする配慮であった。

だから、芙美江も、泉に対する自分の関係をわきまえて、別の縁談にもすすんでいる。あきらめ、というほどの、強く、意識されたものではないし、だから自分にも縁談があるというのを、泉の前に誇らしい気もしていた。

そんな微妙なものをかくして芙美江は事務的に言う。

「泉さん、時間、大丈夫ですか。私、ちょっと美容院へ行ってきたいいかしら」

「はい、どうぞ」

泉公平はかしこまって答えた。

5

四、五日して、泉公平は芙美江の写真の引伸ばしのできたのを持って帰ってきた。

「あ、できたの？」

秋子は裁断している生地の上で鋏を持ったまま顔を上げた。

「お世話さまでした。どんな？」

芙美江は気がせくように、先ず泉から受けとって、自分の写真をじいっと見つめた。